威力を生み出す形と場

頼富 本宏
国際日本文化研究センター

1　はじめに

国際日本文化研究センターでは、国際的・学際的な視点から日本文化を総合的に研究しているが、その中でも重要な位置を占めている共同研究班の一つとして、平成11年度から「聖なるものの形と場」(代表・頼富本宏教授)がスタートした。その最終年度平成13年(2001)11月に、「聖なるものの形と場」という同一テーマの国際研究集会が開かれ、従来の共同研究員に加えて、世界の8か国から14名を越す外国人研究者、ならびに70名あまりの国内研究者の参加のもと、意義ある研究発表と活発な討論が行われたことは幸いであった。

この共同研究会の研究方法論については、本報告書の冒頭でも触れたが、日本に限らず、世界の主要な宗教の研究者のみならず、美術史、心理学、社会学、歴史学などの関連領域の分野からも「聖なるものの形と場」について様々なアプローチを試み、各発表に対して議論を積み重ね、次第に合意を得るという非常に帰納的な方法を用いることとなった。その中間報告的な概要は、本書の一部、もしくは別に刊行される成果報告書で要約することにしたい。

2　聖なるものの属性

「聖なるもの」という用語は、古くは旧約、および新約聖書の頃から使用されてきたという。ここで以後の思想史を述べる余裕はないが、人間を超えた超越的存在が想定され、その威厳と保持する力ゆえに、「聖なるもの」と呼ばれたのであろう。キリスト教やイスラーム教などのいわゆる一神教の場合、それが神に収斂するのは明らかであるが、ともあれ人間のみが、「聖なるもの」という意味ある存在を想定できるといえるかも知れない。それに対して、他の動物は「強弱」、つまり「食うか食われるか」という判断や理解は可能であるが、異次元的聖性を他に求める必要は事実上ないだろう。個体保存にとって、聖性は決して必要条件ではない。

この「聖なるもの」は、現実の個人生活、およびより範囲の広い社会生活において、それを認識し、それを想定し、それに依存しなければ生きていけないものではない。時代背景もしくは歴史状況は有力な要因となろうが、超越性と内在性を合わせ持つ宗教的志向性の強いものでなければ、一生の間に「聖なるもの」に目を注ぐ必要性はない。たとえば唯物論的快楽主義からいえば、聖なるものは無縁である。もしくは無価値であり、逆にそこでは実利的利害関係等が基準となることが多い。

けれども、宗教的感性が豊かで、現象として現れる政治・経済などの日常生活の中で異次元とつらなる価値の体系と意味の世界にアンテナを持つこと、さらに何らかの方法・手段によっ

て聖性を付加すること、いわゆる「聖化」されることによって、「聖なるもの」は現象の中でも有効な意味を持つことになる。一方、そういう聖性とはつながりを持たない世界・在り方が、「俗なるもの」ということができるだろう。

こうした「聖なるもの」が理念的に存在している、つまり可能態としてあると、いわば仏教的な用語を使えば「本有的」に、アプリオリに存在するとする場合と、そういう理念的・静止的な存在から作用を伴った発動、換言すれば可視的世界に顕現する場合の二つのケースが考えられる。

たいていの宗教の場合、その両面を具備しており、仏教、とくに体系化された大乗仏教(唯識派)の思想では、当体としての「聖なるもの」を法身、顕現し、人びとを救済したり、教化する作用を持った「聖なるもの」を報身と呼んでいる。

上記の二様の在り方(態)が想定される「聖なるもの」のうち、前者の理念的な聖なるもの、たとえばキリスト教やイスラーム教などの一神教の神などは、その抽象性のゆえに動作・作用性は本来は顕著ではないはずである。しかるに一神教の神は、おおむね人格神の要素を付与されるため、結果的には人間の作用・動作・属性を敷衍した形の働きを持つこととなる。

これに対し、コスモス的な宇宙神では、仏教の法身のように、本来は作用性に乏しいが、「聖性」と対極の位置にいる我われ「俗なるもの」との対応関係を視程に入れるとき、報身の顕現、言葉をかえれば、無限定なるものの自己限定が行われる。その代表的な例が、マンダラの出生(顕現)であり、『金剛頂経』に説かれる金剛界マンダラでは、無限定なる宇宙的存在、いわゆる全体仏である摩訶毘盧遮那が、俗なる世界にいる我われをさとりに導くために、現実世界上に仮設された可視的なマンダラの中央に顕現することになるのである。

この場合、最初の普遍的な全体仏・摩訶毘盧遮那であれ、一段私たちに近づいた大日如来であれ、いずれも「聖性」を有した「聖なるもの」であり、両者とも多少性格と意味の異なる「力」、「威力」を有していることは明らかである。

本論では、「聖なるもの」の属性・作用の一つとされる力・威力を生み出す「もの(形)」と「空間(場)」を『般若心経』と四国遍路という二つの具体例を用いて考察してみたい。

3　般若心経と威力・力

仏教が単なる論理的緻密性や整合性の妙意を特徴とする哲学にとどまらず、実際にこの現実を生きる私たちに影響力を与える存在であるとすれば、そこに「威力を生み出すもの」が問題とならざるを得ない。

仏教の場合、古来「聖なるもの」に対しては、大別して二種の捉え方があった。それは「聖性」を体現した「仏」に基準を置く立場と、「仏」を仏たらしめた「存在としての聖性」、つまり「法」に重点を置く立場である。

この二つの流れは、決して別々なものではなく、仏陀釈尊の在世の頃から意識され始め、とくに釈迦が涅槃に入った(死去した)後は、その遺骨(仏舎利)を重視して、さらにそれを収める仏塔を信仰の対象とした崇仏派と、釈迦もそれをさとったからこそ「成仏」した直接要因のさとり(法)そのものを基本に置く崇法派の二種のグループがあったことは周く知られている。

『般若心経』の問題に限定すると、「経」とは、聖なる仏が説いた言葉を文字で表現したものではあるが、その内容はさとりと異ならず、むしろ「法」を表現したものであり、経は法と等値される。

したがって、経は「聖性」の負荷を帯びていることは当然であり、「聖教」という漢語も普及している。そういう意味では、ほとんどすべての経典が「聖なるもの」であるが、経典の内容を考察の対象に入れると、とくに『般若心経』の場合、前半と後半がまったく違った内容であり、それと連動して「威力」、「力」を生み出す要因も相違していたものと思われる。

数ある仏教経典の中でも幅広い信仰を集めてきた『般若心経』にも、厳密にいえば、現行の略本とその前後に序分と流通分を備えた少し長い広本が伝えられているが、本文(正宗分)は差違がない。文献学的には、唐代の玄奘三蔵(602-664)によって訳出された『般若波羅蜜多心経』が最も知られているが、現在、四国遍路や西国巡礼などの信仰の現場で唱えられているのは、字数が262字の『仏説摩訶般若波羅蜜多心経』で、俗に流布本とも呼ばれている。

この経典が一千数百年の時代を越えて今も唱えられ、書写されているのは、もちろん信じる側の期待と要請が大きいことは否定できない。しかし、もう少し宗教学的に冷静な目で見ても、同経が「聖なるもの」の属性、および作用の一つである「威力」、「力」を生み出し得る根拠があるからこそ、人びとに支えられていると言っても過言ではない。

すなわち前半を重視する立場からは、『般若心経』とは、数ある大乗経典の中でも「ものごとに執着しない空の教え」を説く『般若経』の心要であるから、「心経」と呼ばれるとする。そこでは「諸法空相」(あらゆるものは、固有単独の在り方で存在しているのではない)という主張のもと、有名な「色即是空」や「無色声香味触法」などの句が説かれる。

すでに知られているように、同経の前半部に「無」や「不」が多出するのは、決して「～がない」という命題を並べることによって、存在を否定しているのではない。そうではなくて、(固有の本性を持った在り方としては)存在しないという在り方の否定なのである。換言すれば、あらゆるものは単独的に、あるいは固定的に存在するのではなく、いわゆる因(直接原因)や縁(間接原因)によって縁起的に生起しているのであり、この真相(空相)を知ると、かえってすべての世界がありありと現われ出てくる(空即是色)。

このようなとらわれのない自由な世界が「空の教え」であり、『般若心経』の一方の要点であることも確かに事実である。この部分と同経の「威力」、「力」を検討してみると、宗教構造的には、対象や存在に対してとらわれがなくなると、主体が転換することとなり、世界の見方がまったく異なってくる。たとえば、今まで不平や不満ばかり述べていた人間が根底から変化して、他の存在と世界に対する見方が変わると、苦であったものが苦でなくなってくる。このような主体の転換による変化も、主知的な力が働いた結果といえる。

象徴的なたとえだが、智恵のほとけである文殊菩薩の持つ鋭い刀剣は、まよいの煩悩や世間の言語的多元性(諸戯論)を絶つ有効な威力を持つものであり、空の智恵を表す般若波羅蜜多は、迷妄を断ち切る智的な力であることは疑いない。

『般若心経』を評価する立場のうち、一休、沢庵、白隠などの禅僧、さらに近年の啓蒙的仏教理解では、主に前半部の「諸法空相」や「色即是空」などのとらわれのない空の教えが強調されてきた。

それも一理あるが、それだけでは『般若心経』の後半部は不要である。しかるに、『般若心経』の他の翻訳を見ても、末尾の「ギャテー、ギャテー」以下の心呪(真言)を説かないものは一例もない。

ということは、後半部で説かれる「般若波羅蜜多がこれ大神呪、これ大明呪云々」という主張と、般若波羅蜜(多)そのものを讃嘆した真言である「ギャテー、ギャテー、ハーラギャテー、ハーラソウギャテー、ボーディ、ソワカ」というマントラ(真言)は、同経の全体を集約するほどの重要な意味を持つことになる。

結論を先に述べれば、空の智恵そのものが般若波羅蜜多(最高の智恵)に他ならない。『般若心経』の前半部は、その智恵の内容を「諸法空相」を理解することによって説示したが、後半はその実体性、最近の言葉でいえば存在感をむしろ積極的に讃嘆した。また存在性、実体性のあるものは、当然何らかの結果をもたらす力を誘発する。その力が相手(対象)にとって有効に作用するときには、いわゆる功徳(利益)を生み出すことになる。

『般若心経』の後半に説く「能く一切の苦を除く」(能除一切苦)の主語は、明らかに般若波羅蜜多であり、その理由は次句の「真実にして、虚ならざるがゆえに」(真実不虚故)が示すごとく、真実の智恵こそは必ず正当な(整合性のある)結果をもたらす力があることを強調している。

そのような真実と直結した最高の智恵こそが般若波羅蜜多であり、それを聖語として実体的に表現した呪句(マントラ)、すなわち「ギャテー、ギャテー」以下の心呪が聖性のシンボルにとどまらず、実体的存在となり、ひいては威力・力を生み出すと考えられるに至るのである。

少し内容とアプローチが異なるが、わが国の古代から中世にかけての文学論の中に「言霊論」があり、いわゆる言語伝達機能論とは別に、一種別の言語実在論の流れに属するものであるが、『般若心経』も前半の論理・智の力から、後半はそれを聖句に集約した呪句の力に中心をシフトしたといえよう。

なお、日本では一部の密教マンダラにしか表現されなかったが、『般若心経』(広義には『般若経』)の力の表現化の第三の段階が尊格化、つまりほとけとしての『般若心経』である。要するに、『般若心経』のエッセンスである般若波羅蜜多(最高の智恵)が聖句にとどまらず、聖なるほとけに尊格化されたのである。その場合、母胎となる般若波羅蜜多(prajñā-pāramitā)がサンスクリット語の女性形なので、尊格化されたほとけである般若菩薩も女尊として考えられた。そして尊格分類的には、ほとけの当体そのものよりは人間などの存在に少しでも近い菩薩の範疇に配されている。適切な専門用語は従来存在していなかったが、便宜上「仏母」、もしくは「女尊」と呼ばれており、聖性にも男女の性区別を積極的に導入したインドでは、豊満な胸を持つ女性のほとけとして般若菩薩が表現されている。

このように、最高の智恵がほとけとして尊格化された場合には、逆に威力・力もほとけの中に再び統合されることになり、他の観音菩薩や不動明王と同じく、ほとけの属性・働きとして再解釈されることになる。力のダイナミズムのサイクル化とも呼べる。

ともあれ『般若心経』の場合は、「聖なるもの」、厳密にいえば聖性の持つ威力・力が、聖句と尊格という一種の形をとって顕現する好例といえる。

4　四国遍路の威力・力

もう一つのテーマである四国遍路は、一千年を越える歴史を持っているが、近年とくに幅広い世代の人びとに関心を持たれ、一種のブーム的様相を呈している。その最大の理由は、四国という空間を遍路、もしくは巡礼するという行為が、宗教的意味や目的に限定されず、もっと自由で気楽な「リフレッシュ」、「自分探し」の場として多くの人びとに開かれているという事実である。

最近、数多く出版されている遍路記を読むと、最初からある種の宗教色を持ったものは敬遠されて、むしろ文化発見、自己発見的な内容の方が歓迎され、売れ行きもよい。その場合には、聖なる空間(聖地)を巡るという認識はむしろ希薄で、一種の異文化体験というスタンスが強い。必ずしも「聖地」である必要は少なく、むしろ中軸となるのはどこまでも自分である。その自分を見る目が成長したり、新たな部分が現われるきっかけを与えてくれるのが四国遍路であり、そういう立場からいえば、八十八か所の札所そのものよりも、それらをつなぐ遍路道、つまり「線の聖性」がむしろ大切になる。

しかしながら、宗教色を極力薄めた「自分探し」遍路が必ずしも四国遍路の多数派ではない。やはり、「聖なるもの」の空間である四国八十八か所を巡る多くの人びとは、身近な故人の追善供養や現実世界での病気や災難などの回復など、様々の祈願を胸に秘めて遍路する。もちろん一見何の愁いもなく、観光やレクリエーションとして捉える人も多いが、まがりなりにも白衣を着て金剛杖を持ち、各札所で一心に『般若心経』を唱える遍路者は、「聖なるもの」の生み出す威力・力を期待しているのである。

それでは、四国遍路がなぜ「聖なるもの」の力に預かることができるのかを考えてみよう。いささか構造的な把握となるが、やはり「聖性」を保持する場がポイントを形成している事実をあげることができる。

たとえば、四国遍路を「正式」に行うと、各札所(霊場寺院)で2回ずつ、合計176回のお勤め(読経)をする必要がある。これは、しばしば対比される西国観音巡礼(三十三所巡り)にはない特色であり、四国遍路の二重の聖性確保の特異性を示している。

第一に、八十八の札所寺院には必ず本堂があり、そこには本尊仏が祀られている。その内容はまったく自由で、最も例の多い薬師如来を筆頭にして、阿弥陀如来、大日如来、千手観音菩薩、地蔵菩薩、不動明王と多種多様である。そして、各ほとけ自身が「聖性」を保持している「聖なるもの」であるはずなので、いわば四国全体としては「点の聖性」の集成ということになろうが、それらを八十八か所巡礼することによって、各ほとけの聖性を預かり、その威力・力の直接的関与を願うことになる。

第二に、現在の八十八か所札所には必ず大師堂があり、そこでも『般若心経』などの勤行を行う。札所の集印だけをいただいてお勤めは頭を下げるだけの横着遍路もないではないが、スタンプである集印から「威力」、「力」が単独で生じてくる可能性は低いのではないか。

大師堂は、名前の通り、弘法大師(空海)を祀った堂であるが、歴史的には本堂の方がはるかに古く、近世初期には単独の大師堂のない札所もあった。ところが、今では「同行二人」という

言葉が「弘法大師と二人づれ」と解釈されるように、人間空海もその開創に関与したとされる四国遍路において、中世の頃から弘法大師が開いた修行の世界であり。四国霊場全体(点も線も含む)が時間・空間を超えた高次の宗教的存在である法身・弘法大師に覆われている(生かされている)と考えられるようになったのである。

すなわち、後者の場合では、単に札所の寺だけではなく、四国全体が弘法大師の世界であり。言葉を換えれば「聖なる四国」ということになる。このように、部分と全体の両面から「聖性」が構築された四国遍路は、孤立性、完結性の乏しい西国巡礼よりも強力なインパクト持つことができ、まさに「聖なるものの場」として揺るぎない地盤を固めたといえよう。

5　威力を生み出す形と場

威力を生み出す形と場というテーマで、とくに現代の仏教の中で人気を集めている『般若心経』と四国遍路を取り上げ、それぞれ「形」と「場」という切り口から論を進めてきた。

聖性の負荷を帯びた、あるいは何らかの方法によって聖化された「聖なるもの」が、いくつかの特性、特徴を持つことは、故 岸本英夫博士をはじめとしてたびたび論じられてきた。インドの思想の例をとれば、最高の実在であるブラフマン(梵 brahman)は、存在性(sat)、智性(cit)、歓喜性(ananda)を備えているとされるが、確かにインドの多くの思想は、実在(聖)と現象(俗)の絶望的な乖離よりも、融合、一致、重複などの異次元の交流を強調する。

「威力・力」とは、理念的に「聖なるもの」の超越的な要素を重視した場合、他(宗教的には我われ)に対して何かを引き起こすであろうエネルギーの量と方向性をさすということができる。物理学で用いるところのベクトルや、金属疲労などを扱う科学工学(応用力学)でいう応力(ストレス)の概念を借用すると、比較的理解しやすい。もっとも一神教の絶対神のケースでは、信者・行者側の信仰や修行などとの因果関係を必要としないことも少なくない。

逆に、発展途上国を中心とした文化圏に生き残るアニミズムやシャーマニズム、さらにはインドを始めとする南アジア世界に顕著な聖俗一致のヨーガ思想と実践によれば、大宇宙や大自然とヨーガ(融合)した境地(三昧)で体験される実体感や森厳感が、「威力・力」の存在への確信の一因となったものと推測される。

ただ、この威力・力は、「聖なるもの」の属性、もしくは作用とされるが、信者や修行者から要請・想定されたものでもある。皮肉な表現をすれば、「人間が神を作った」という言葉があり、始めにも述べたように、確かに人間だけが、しかも宗教的志向性を持つものだけが「聖なるもの」を考え、意味化することができるという現実的指摘がある。

以上のような神秘主義的な要素をも内在させる威力・力をできるだけ因果律の適応する現象世界の中に位置付けて、気まぐれというよりは、フィクション的性格も有する「聖なるもの」のおぼろげな実体を、『般若心経』と四国遍路という仏教文化のいくつかの要素によって探ろうとした。

「聖なるもの」は、理念的に実在するものであっても、即物的に何らかの要素によって聖化されたものであっても、その聖性ゆえに絶対性・超越性を必然的に内包している。したがってマンダラ諸尊の出生のように、密教的なプロセスを用いれば、無限定・不可視の存在(自性マンダ

ラ)が、宗教的発動によって心(観想)の世界の中に第一歩をしるす(観想マンダラ)。それを万人と共有するために姿・形をとって表現したのが、形象マンダラである。

第二段階のイメージの世界と第三段階の表現の世界との関係は、芸術・美術の観点から非常に興味深いが、最終的に感覚の世界で「聖なるもの」として体感できるのは、姿・形という表現を通してのみ可能である。『般若心経』の場合、般若菩薩という尊格を生み出し、それを図像表現して「聖なるもの」を再収斂させ、かつ一断面としてコピー化したといえようか。

四国遍路の場合は、「聖性」を生み出す装置が二種以上仕掛けられており、それをトータル化した世界を広義の場と呼んでよかろう。「場」の在り方も、その内部での均一性と非均一性の議論が必要だが、いわば如来蔵的法身弘法大師の世界に遍路者が包みこまれていると考えたい。

最後に、聖俗の二極構造とその接近・融合に最も敏感、かつ積極的であったのが仏教といわれる宗教であったが、なかでも密教がとりわけ大きな花を開かせた。その代表的な経典である『大日経』では、三力という思想を説き、しかも観法・実践として行法体系の中に組み入れている。

それを読み下しすれば、「我れの功徳力と如来の加持力と及び法界の力をもって、あまねく供養し、しかも住す」となるが、この短い文中に「聖なるもの」と「俗なるもの」の関係、および両者の間の「威力・力」の流れを示唆している。

最初の「我れの功徳力」とは、「聖なるもの」に向かい、しかもベクトル的に上昇をめざす力である。たとえ「俗なるもの」であっても、自らの修行や信仰のエネルギーが重要な役割を果たす。ある日突然、神仏を体得することはあるとしても、それにはその器がある程度の成熟を満足していなければならない。

第二の「如来の加持力」のうち、「加持」とは仏や神のような聖なる存在から救済の力が降下することで、この「聖なるもの」の存在と恩寵・愛・救いなどの下降する力を認めたり、要請するところに宗教が成り立つ。

以上の二種の力が、聖と俗の二極を交叉する上方、下方への力であるとすれば、第三の「法界力」は、それらがめぐり会える「場」ということができる。この場合の「場」とは、単なる空間にとどまらず、時間をも含む機会・契機を意味するが、現実的には「聖なるもの」が姿・形をとって顕現し、しかも俗なる我われがそれを実際に体得する宗教的空間にあたる。四国遍路は、それを有効に備えた聖地霊場の典型的な例である。

【Abstract】

Figures and Places that Produce Power

YORITOMI Motohiro
International Research Center for Japanese Studies

During the past three years since 1999, numerous study sessions were held at the International Research Center for Japanese Studies to discuss the "figures and places of the sacred". To sum up the observations that were made, an international symposium was sponsored last autumn. I would like to discuss one of the most important attributes of the sacred which is its power and authority.

The word sacred can even be found in the earliest accounts of the Old Testament. It seems that the sacred signified a being who transcended ordinary mortals in his supreme power and authority.

Sacred things can exist as ideas or actions that arise from supreme beings, but both are manifested in the complex relationships of numerous Buddhas and Bodhisattvas contained within the maṇḍala. In this study, we will examine the *Heart Sutra* and the Shikoku pilgrimage as examples of figures and places that produce the power and authority of the sacred.

If Buddhism can be viewed as a religion that hopes to save us from worldly sufferings, which is more than an elaborate philosophy, then it will inevitably involve the problem of power. The *Heart Sutra* which continues to be worshiped by numerous believers is considered to be sacred, because it contains enlightened teachings. Although the first and second half of the *Sutra* have vastly different contents, it still exerts a considerable amount of sacred authority. While the first half expounds upon the intellectual power that comes from the wisdom of investigating the emptiness of subjectivity, the second half depicts how *shingon* is directly related to the transcendental wisdom which is manifested through a sacred incantation. Furthermore at the end, the texts itself is deified as the *Prajñā Bodhisattva* and its sacredness and authority are manifested.

The sacredness and power of the Shikoku pilgrimage is constructed as two levels. As the first significance of the pilgrimage, the main Buddha at each temple symbolizes the central point of sacred space. During the medieval period, the island of Shikoku itself was conceived as being surrounded by the sacred universe of Kobodaishi's dharma body. In other words, this phenomenon can be understood in terms of sacred lines or the roads of the pilgrimage.

In esoteric Buddhism, our merit that comes from below and Buddhas' mystic power that comes from above meet in the intermediary space of the dharma world. In the case of the *Heart Sutra*, the sacred is manifested as descending from above as forms and words, while the Shikoku pilgrimage serves as sacred space that functions effectively by attracting numerous believers.